

「土」から始める国際化 (Internationalization: Beginning with the Earth)

—埼玉県小川町での実践報告—

佐藤 太 (フリーランス通訳、翻訳、英語講師)
リッチー・ザイン (コミュニティ政策学科教員)
宮崎 晴子 (コミュニティ政策学科2年)
空閑 厚樹 (コミュニティ政策学科教員)

はじめに (空閑 厚樹)

「福祉」を学ぶ時、「国際化」が意識されるのはどのような場面だろうか。福祉を、生活に困難を抱えている人を支援することと理解するなら、おそらくそのような機会は多くないだろう。たとえば、厚生労働省のホームページを見てみると、福祉に関連する政策領域として「障害者」、「生活保護」、「高齢者」が挙げられている。そして、その政策内容について国際化に関連する言葉は出てこない。これは、上記の意味での福祉課題を具体的に解決することが求められ、そのための資源や制度は国家単位のものであり、現状では福祉の対象の多くは日本国籍を有していることを前提しているという実態を反映しているからだろう。しかし、福祉を「「ふ」つうの「暮」らしと「し」あわせを保障する」(2016年度立教大学コミュニティ福祉学部パンフレット)と理解し、そのような福祉をコミュニティで支えると考えるなら、上記とは異なる多様な場面で「国際化」が意識されることになるのではないだろうか。

一昨年、立教大学は「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択された。コミュニティ福祉学部でも学部の国際化を進める取り組みを始めており、昨年度の学部国際交流委員会において、以下三点の方針を決定した。すなわち、1) コミュニティ福祉学部の特色を活かした国際化の促進、2) 日本国内でも実施可能な国際化プログラムの開発、3) 多様な海外研修プログラムの提供、である。本稿では昨年度実施した2) 国内実施プログラムの実践を報告する。

このプログラムは、「「ふ」つうの「暮」らしと「し」あわせを保障する」ことを、コミュニティの視点から考える時、「国際化」と深く関連する今日的課題が意識されることを学生とともに学ぶために企画された。プログラム立案にあたり設定した目標は、「コミュニケーションの道具として英語を使ってみる」、「語る内容

を生み出す経験をする」そして「日常の暮らしを持続可能性の視点から考える」の3点である。そして、活動の場は埼玉県小川町とし、同地で農的暮らしを実践している佐藤太氏の協力を得て実施した。本プログラムを企画、提案し、本稿執筆者でもある空閑は2005年より佐藤氏の農園で学生たちと農作業プログラムに参加してきた。その経緯から、小川町で佐藤氏の協力を得て実施することで効果的なプログラムが実施できると考えた。

埼玉県小川町は有機農業の実践地として国内外の高い評価を受けている。またコミュニティ・ビジネスや文化資源を活用した地域活性化活動など持続可能な暮らしを目指す多様な実践が展開されている。急速に進む社会のグローバル化のマイナスの影響への対応として、コミュニティの果たす役割が見直されている。このような中で、普通の暮らしと幸せを地域の力で支えるために求められていることを具体的に学ぶ場として埼玉県小川町は相応しいと考えた。

佐藤氏は、この小川町で有機農業による農的暮らしを実践している。同氏は海外NGOでの活動を経て、内閣府「世界青年の船」事業の指導官、NGO「ピースボート」コーディネーターを務めるなど豊富な国際経験を有している。また、同氏は国内外から多くの参加者を迎えて定期的に農作業イベントを実施している。さらに英語教授経験および英語によるワークショップ実施経験もある。小川町での実践、英語教授経験、国際的なネットワークを有する同氏の協力を得ることで、本プログラムを実施することができた。

さらに、本プログラムでは本学部教員のザイン・リッチー氏の協力も得ることができた。同氏の適確なコメント、助言、積極的なプログラムへの参加によって本プログラムの目標に即した活動を行うことができた。

本稿の題である、「[土]から始める国際化」の「土」が意味するのは、生活の基盤である。私たちは食べなければ生きていけない。私たちが口にするものの多くは、農作物、そして家畜の飼料等、さかのぼれば土から生み出されている。そしてこの暮らしの基盤は、今日グローバル経済の影響を最も受けている領域でもある。本プログラムで、受講生に農作業、自分たちで収穫した野菜の調理、そして共に食べる経験をしてもらった。そして、これらの経験をもとに、農業および食の置かれている状況を国際的な視野から学び、意見を交換するワークショップを実施することで、日々の暮らしを見直す機会を提供することを目指した。

以下、第一章で佐藤太氏によるプログラム内容の詳細な報告、第二章でザイン・リッチー氏による本プログラムの成果と課題の検討、第三章で参加者の感想を紹介する。

I. プログラム内容（佐藤 太）

「学生たちの国際化に資するための企画は、国内でもできるのではないか。自

分の国の状況や課題についてより良く知り、そのことについて自分なりの意見を持ち、他の人たちと意見交換することも、立派な国際化のための取り組みだろう。」学部の国際化対応に関するアイデアを話し合う機会があり、その席で共同執筆者である空閑氏から言われたこの言葉は、私にとって目を開かされるものであった。長い間の国際的な仕事や活動を経て農的な暮らしに落ち着いた私自身は、このようなライフスタイルが貧困や環境破壊などの世界の課題の解決につながると考えて生活している。それにも関わらず、学生たちの国際化と聞いた時には、まず留学や海外体験などが必要なのではないかと考えてしまっていた。

内閣府の国際交流事業に指導官として関わってきたことから、外国人との交流や議論の場で日本人大学生が抱える課題については身近に知ることができている。その一つは英語力の不足であり、もう一つは様々な社会的テーマについての自分なりの意見を形成できていないことである。これらの課題は、立教大学コミュニティ福祉学部の学生たちにも当てはまるようであった。このプログラムの立ち上げにご招待いただき、上記の「国内でもできる」という言葉に大きく勇気づけられて、参加させていただくことにした。幸い自給用農園を使った体験企画を定期的に開催しているほか、英語でのディスカッションの指導の経験もあり、生業として英語を教えるもいる。これらを組み合わせて、楽しくてやる気のわくクラスを作ることは、大変やりがいのある作業であった。

プログラム全体として設定した目標は、序章にあるとおり下記の3点である。

- 1) コミュニケーションの道具として英語を使ってみる
- 2) 語る内容を生み出す経験をする
- 3) 日常の暮らしを持続可能性の視点から考える

ここでは、これらの目標を各回の授業に落とし込むにあたって考慮したコンセプトや具体的な授業内容、全体の流れを作る上で考慮した点を紹介し、その後に実際の授業での出来事やそこからの学び、今後への課題などにも触れてみたい。授業は、私の自給用農園とそれに隣接する公営の施設（教室及び調理室）を利用して行った。

【コンセプト】

「人」、「自然」、「食」と触れ合いながら目標項目を達成する。

【各目標に対応する授業項目】

- 1) コミュニケーションの道具として英語を使ってみる
 - a. 英語力の向上を目指して、重要文法や技術を学び、練習する

- ・コミュニケーションの道具として英語を自分で組み立てられるよう、基本的な部品を手に入れ、基本的な組み立て方を学ぶ。同時に、既に持っているものを十分に活かすことも学ぶ。
- ・受講者の英語レベルのおおよその目安として、英検準2級から2級程度、TOEIC500点から600点ほどを想定した。



写真1：グループでの議論風景

b. ディスカッションの練習をする

コミュニケーションの道具として英語を実際に使う体験をするために、特定のテーマについて「自分の意見を持つ」ことや「その意見を他の人に伝える」こと、「人の意見を聞いて、質問したり自分の考えを述べる」ことなど、日本人学生のあまり得意としない分野の訓練をする。

2) 語る内容を生み出す経験をする

a. 食べ物を育てる体験をする

英語を道具として使う場、また語る内容を生み出すための場として、田畑での活動を用いる。身近なものでありながら普段その成長過程に触れることの少ない「食べ物」の栽培に関わることは、新鮮な感激と喜びの感情を醸成し、学びへの意欲を促進する。

b. 食べ物を調理し、一緒に食べる

英語を使ってみる場として、そして語る内容を生み出す場として、農作業に加えて調理と食事の場を用いる。これも農作業と同じような新鮮な体験の場となる。

3) 日常の暮らしを持続可能性の視点から考える

a. 農作業をとおして、人間と自然との関係を見直すきっかけを作る

田畑での農作業体験から、人間と自然とのつながりや豊かさについて実体験から学び、考察の機会を得る。

b. 共に調理し食べることをとおして、豊かな社会の形を考えるきっかけを作る

「持続可能性」を考える上での重要なテーマは、「豊かさとは何か」という問いへの答えを探ることであろう。「共に調理し食べる」ことは、この問いを日常の暮らしの中から考えることのできる貴重な体験になるだろう。

4) 海外での交流事業などへの関心を持ってもらうため、国際交流事業を紹介

する。

「日本国内でも実施可能な国際化プログラム」を進めつつ、海外留学や国際交流事業などを紹介できれば、国際化に果たす役割をさらに深化させることができるのではないかと考え、佐藤が関わって来た内閣府の国際交流事業を紹介する。

【授業内容】

1) a. 英語力の向上

30分ほどの時間を取って解説し、練習した。

第1回：・一般動詞(Do)とBe動詞の違いを理解して使い分ける

・SVOとSVCの文型を習得する

第2回：・5W 1HのQ&Aに慣れる

・「英語を訳さずに理解する」ことを目指す：まずは、英語が頭からぶつ切りでも理解できることを知り、「きれいな日本語訳」を意識せずに訳す練習をする

第3回：・『文を形作る』、SV、SVO、SVC、SVOO、SVOCの文型を活用する

・頭から訳す練習続き

第4回：・接続詞のthatを使いこなす：関連する2つの文を、接続詞のthatでつなぐことで、より豊かな表現を作り出すことができることを学ぶ

第5回：・関係代名詞(who、which、thatやその変化形)を使いこなす：関係代名詞を使うことで、一つの単語を中心にしてより幅広い表現をすることができることを学ぶ

1) b. ディスカッション力を付ける

まずは、意見を持つこと。それを表現すること。持っている語彙や作文力で、どのように表現するかを学ぶ。この他に、導入としての自己紹介や、アイスブレイキングなども行った。

第1回 テーマ「好きな食べものチャンピオン」

1) ペアになり、質問し合って相手の好きな食べ物を当てる。

2) 小グループに分かれて、それぞれの好きな食べ物をKJ法的にカテゴリー分けする。その食べ物の特徴を一番よく示すカテゴリー分けを考え、説明する。

第2回 テーマ「自分と食の距離を考える」

普段、食べているものや食べることに
対してどれくらい気にかけているかを
見直し、距離を縮める方法を考える。

- 1) 4人ずつのグループに分かれ、農作業で感じたことを「ポジティブなこと」「ネガティブなこと」「ニュートラルなこと」に分けて1人ずつ発表する



写真2：グループでの発表の様子

- 2) 自分と食の距離（＝どれくらい食のことを気にしているか）を測るために使えるもの、できること、のリストを作る（産地を見て選ぶ、添加物を見て選ぶなど）
 - ・各自自分の推す方法の利点を説明し、上位3つを選ぶ
- 3) 距離を近づけるためにできることのリストを作る
 - ・例えば、農作業体験企画を作る、お料理教室をするなど
 - ・各自自分の推すものの利点を説明し、上位3つを選ぶ
- 4) 各グループからの発表

第3回 テーマ「クリスマス企画対決」

・小グループに分かれて、このクラスでクリスマスパーティーをするという想定で企画を考え、発表し合って人気投票する

第4回 テーマ「お米派？小麦派？」

・今回を含めた4回で、農作業でも、調理・食事でも、お米と小麦の両方に接してきた。そこで、その両者に分かれて魅力を伝え、自分たちの側がより優れていると説得することを試みた。今回は、「お米派」「小麦派」のメンバーをあらかじめこちらで決めてお知らせし、事前に情報収集をもらった。

第5回 テーマ「このプログラムの改善方法と宣伝方法」

・これまで楽しく学びを深めてきた本プログラムをより良いものにし、他の学生たちにも知ってもらうにはどうしたら良いか、小グループで話し合い、発表した。

2) 語る内容を生み出す経験をする

2) a. 食べ物を育てる体験

季節と各回の時間的な余裕などを考慮し、以下の農作業を行った。

第1回（9月20日）

- ・ニンニク植え付け、ハクサイ定植、種まき（ミズナ、タアサイ、ホウレンソウ）
- ・栗拾い

- ・ソバ、ゴマ見学
- ・野菜の収穫：長ネギ、枝豆、間引きニンジン

第2回（10月11日）

- ・稲刈り、稲わらでしばる、はざ棒に掛ける

第3回（11月15日）

- ・ソバの脱穀
- ・野菜の収穫：ダイコン、ニンジン、長ネギ

第4回（11月22日）

- ・パン用小麦の種まき
- ・野菜の収穫：ダイコン、ニンジン、長ネギ、レタス、ラディッシュ

第5回（12月6日）

- ・野菜の収穫：ニンジン、長ネギ、キャベツ



写真3：稲刈りに向かう

2) b. 調理と食事

第1回

- ・農園で採った野菜を使ったサラダ（及びサラダドレッシング）とみそ汁。
自家農園のご飯

第2回

- ・施設の都合で料理はせず、各自弁当持参。手作り味噌の味噌汁を作った。

第3回

- ・昼食：自家農園新米を使ったおにぎり、採りたて野菜の炒め物、味噌汁（自家製味噌）
- ・おやつ：自家製小麦粉（全粒子）で作るホットケーキ（メイプルシロップ、梅ジャム）

第4回

- ・昼食：自分たちで手打ちうどん、野菜炒め
- ・おやつ：自家農園もち米のおもち（ホームベーカリー使用。きな粉、お汁粉）

第5回

- ・野菜たっぷりすいとん、ニンジン葉のちじみ、サラダ



写真4：収穫した野菜を使って調理

3) 日常の暮らしを持続可能性の視点から考える

- ・収穫や見学を含む全ての農作業と料理をとおして、この項目の達成を目指した。
- ・畑では、植物の成長と私たちの摂取するエネルギーの関係などについて学んだ。

4) 海外での交流事業などへの関心を持ってもらうため、国際交流事業を紹介する

- ・最終回である第5回に、内閣府国際交流事業担当部署の職員の方を招き、同部署が担当する国際交流事業の説明をしていただいた（日本語）。また、同職員の方の個人的な国際交流体験について語っていただいた（英語）。

【授業全体の構成で考慮したこと】

- ・農業体験として何ができるかを、予定の日付から想定して計画する
- ・調理/食事では、自給農園からの作物を最大限用いたメニューにし、さらにディスカッションにつなげることも考慮した（例えば「お米の良さ」と「小麦粉の良さ」を両方味わうなど）
- ・各回に、道具としての英語実践を含めながら、回を追うごとに英語力とディスカッションレベルを向上させる
- ・当日の農作業や、日常の食に関わるテーマから、ディスカッションの盛り上がりそうなものを選ぶ
- ・できれば、各回のディスカッションに連続性を持たせる
- ・英語での発言が得意でない学生も積極的に参加できるように、自己紹介やアイスブレイキングで楽しい雰囲気を作り、ディスカッションのテーマも難しい単語が無くてでもできるものにする

【実際の授業での出来事や様子】

- ・当初の予定よりも1回の授業時間をやや延長させていただいた（午前11時から午後5時の6時間）が、それでも時間的な余裕はほとんど無かった。
- ・日本人同士で英語を使うことができるかやや不安だったが、第1回のアイスブレイキングなどがうまく機能したのか、全授業をとおして英語でのやり取りが活発に行われた。
- ・学生の英語レベルには大きなばらつきがあったため、どうしても若干易しめな表現を使うことになり、また一部日本語での説明も必要になった。
- ・英語でのやり取りは活発に行われたものの、内容を深めるためには英語力が

不足していた。そのため、当初予定していた「持続可能で豊かな社会について」議論することはできなかった。

【課題】

- ・時間どおりに進行させることと、日本語をできるだけ使わずに英語で説明すること（時間がかかる）をどこまで両立させられるのか、どこまでさせることが望ましいのかを再検討する必要がある。今回は、農作業の説明や調理の指導の部分でかなり日本語を使う場面があったが、学生からはできるだけ英語でやってほしいとの要望も出た。
- ・各回の英語授業での文法などの学びをディスカッションで十分に実践し修得することができていない。



写真5：収穫の風景

【謝辞】

実際の5回のクラスは、空閑氏、リッチー氏の寛大なサポートのおかげで、無事こなすことができた。何と言っても、参加してくれた学生たちのやる気が非常に高く、それぞれの英語レベルなりに精一杯アクティビティに参加し、最終回でとてもポジティブな感想をいただけたことは、何より喜ばしいことであった。皆さん、ありがとう。

II. プログラムの成果と課題（リッチー・ザイン）

“Everything in nature is truly a part of a cycle” –Mr. Yoshinori Kaneko, founder of Frostpia Farm, and father of the organic farming movement in Ogawamachi

As a native speaker of English faculty member of the College of Community Services, it was my privilege to be invited to participate in the inaugural Ogawamachi Program in 2015. This pioneering program seeks to teach our students about the benefits of eating healthy seasonal foods, food sustainability, and security and the traditional Japanese farming method of using small plots of land to grow vegetables organically, rather than relying on large scale commercial farming that employs the use harsh petrochemical based pesticides and fertilizers that damage the earth. One unique aspect of the program is

that it gives students the opportunity to go out into fields to plant and harvest vegetables and then prepare and cook the fruits of their labours. Another major draw card for students is that much of the program is carried out in English, which is a cornerstone of the College of Community and Human Services' internationalisation initiative.

In the inaugural year, a typical class involved meeting at Ogawamachi Station mid-morning, before moving to the Ogawamachi Community Center by bus, where activities were undertaken on the second floor in a spacious study area connected to a cooking facility. Initially, the students worked outside in Head Tutor Mr. Sato's garden (adjacent to the center) where they planted vegetables, before harvesting their lunch which might consist of a variety of seasonable vegetables, such as carrots, leeks, cabbages, potatoes or root based vegetables such as Japanese radish. This was followed by a cooking lesson in the center's kitchen area, where in groups, students were provided with various natural ingredients and given instructions on how to cook various traditional dishes. My role was to encourage the groups to speak English while they concentrated on creating dishes such as miso soup, various salads, or pancakes. Once, the students even harvested soba (buckwheat) flour directly from Mr. Sato's garden. He informed us that the practice of cultivating soba flour is a dying one and there are fewer and fewer farmers growing it, due to its high labor intensity, which I thought was a shame. These days, much of Japan's soba flour is in fact imported from China. To tell the truth, I probably learned as much about gardening techniques and cooking Japanese vegetables as the students themselves, and often found myself in the role of a learner in addition to my role of a mentor and facilitator.

The main English component of the program usually followed lunch and consisted of a series of lectures conducted by Mr. Sato. A typical lesson involved focusing on farming related vocabulary and several grammar points, followed by discussion and examples, with me providing input where necessary to help engage students with the output process. After a short break, we would then go over a passage of a reading that the students had previously prepared for, on organic farming, for example. We then held group discussions in which students were encouraged to engage in debate and offer their opinions on some of what we had covered in the class. For the final session, students were provided with a task and asked to create a group poster to present in front of the class. The tasks were developed to encourage debate and critical thinking

on topics such as the pros and cons of organic farming, or which kinds of foods were healthier, etc. The point was to motivate students to take responsibility, for their own learning, assimilate some of what they had studied over the day into their presentations, and to encourage deeper analysis and understanding of farming issues in Japan.

Regarding a few suggestions for possible improvements, during post-program feedback sessions we held with the students, some of them mentioned that it would be good if the program was accredited (at the moment students are unable to receive credit for participating). This would certainly increase participation and student motivation, for as it stands participation is voluntary and I did notice that numbers declined slightly as the program wore on, although this could be due to the fact that the program is held on a Sunday as well. Additionally, several students iterated that it would be great if international students or guest speakers could take part, which would certainly provide more opportunities for socialisation and international exchange. I also felt that the students might have been encouraged to speak more English among themselves, outside the confines of the “safe environment” of the Community Center in the fields when they were planting and harvesting vegetables. It is true that outside of the formal study environment, where no formal teaching took place, it was always going to be a challenge to get them to use English, although in the future, students could be encouraged to make the effort to communicate among themselves as much as possible in English. Having said that, this challenge could certainly be mitigated through having international students or visitors partake in activities.

I was highly impressed with the caliber of the students who chose to participate in the inaugural Rikkyo College of Community and Human Services Ogawamachi Program. Throughout the duration, most students remained committed to participating, even though it was held twice a month on a Sunday, and some of them had to travel up from Tokyo or even further afield. The students also eagerly involved themselves in the activities outside on the farm and were always very inquisitive and inquiring. I consider the Ogawamachi Program to be a unique opportunity for students to familiarize themselves with some pertinent social and community issues that begin at the micro-community level, especially the precarious situation that Japan finds itself in regarding its low level of self-sufficiency in food production, a reduction in contact with the land by young people, and the fact that the average age of a

farmer in Japan is now almost 70 years old. Through the program, the students, as young people who represent of the future of Japan, are encouraged to learn and think deeply about solutions to these issues, and are provided with ample encouragement and opportunity to create their own innovative ideas, while connecting with the land and nature.

Ⅲ. 参加者の感想

本章では、本企画を参加者の視点から検討するため、参加者の一人の感想を紹介したい。参加当時1年生だった宮崎晴子氏に執筆を依頼した。

小川町プログラムに参加して

コミュニティ政策学科2年 宮崎 晴子

小川町プログラムは、様々な魅力があふれた独自のプログラムである。その特徴の一つに、プログラムの中に英語を用いるということが挙げられる。このプログラムの面白いところは、まさに農作業をしながら英語も学べるという点である。そして私がこの経験から得たことは大きく分けて、以下の三つである。一つ目に、農作業と英語を話す経験。二つ目に、人とのつながり。そして最後に、「食」に関する学びである。

小川町プログラムに参加した学生は、農業もしくは国際交流や英語に興味のある学生であった。私は、農業にも国際交流や英語にも興味があったため、このプログラムの広報用ポスターを見つけたとき、一瞬で「参加したい」と思った。実際に参加してみると、野菜の収穫や植えなどの今まで興味はあったものの実際にはしたことになかった農作業の経験ができた。それだけでなく、収穫した野菜を調理して食べるアクティビティなどもあり、毎回のメニューは様々に趣向が凝らされていた。例えば、小麦と水だけで作る手作りのうどんや、ホットケーキミックスを使わないパンケーキなどである。また、英語を使うという目的もあったため、プログラム内では英文を読んだり、ディスカッションをしたり、普段の生活では話すことが減多になかった英語を使うこともできた。

二つ目に、このプログラムで知り合った人々との出会いは自分にとって素敵な出会いとなった。自分の周りには農業に興味を持っている人がなかなかいなかったため、このプログラムに参加して自分と同じような興味を持っている人たちと出会うことができたことは貴重であったと感じる。国際交流やその他の分野でも、他の参加者と話していると、自分が知らなかったことを知る機会が多くあり、自分の大学生活での選択肢が増えたことも事実である。講師である佐藤太さんもさまざまな経験を持っている方で、自分とは違う生活スタイルを持っていた。それが新鮮であり、このプログラムを通じて、さまざまな価値観を垣間見たような気

がした。このように、新しい出会いを得ることができるということもこのプログラムの魅力である。

三つ目に、「食」に関する学びである。このプログラム内では、自分が「食」についてどう思っているか、どういう経験に基づいて食について考えるようになったかを参加者と話すことが何度かあった。その他にも、毎回のプログラムの中で有機農業についての文章を読み、訳して発表したり、話し合ったりしたことで「食」に関する教育の重要性を認識し、関心も高まった。最後に、自分が一番良かったと思うのは、誰かに聞いた情報ではなくて、自分自身で農作業をしてみて、「食」について話し合い、自分なりに考えたりすることの経験を得ることができたということである。

おわりに

本稿で紹介した「小川町プログラム」は、日本国内で実施可能な国際化プログラムの一例である。空閑が冒頭で指摘しているように、現状では一般に福祉は国際化と直結しない。またコミュニティ福祉学部において国際化に関心をもつ学生が多いわけではない。しかし、日常の「暮らし」において、言語、習慣、国籍の異なる人々との共生が喫緊の課題となっている。また衣食住など「暮らし」の基盤が国際貿易に過度に依存している現状を理解し、これを批判的に問い直す必要がある。これらのことから、福祉を「「ふ」つうの「暮」らしと「し」あわせを保障する」と理解し、これを国際的な視点からの学ぶ機会の提供が求められているといえるだろう。

ところで、本プログラムは国内で留まることなく、ここで得た知見、経験を活かして海外での学びの動機付けにつなげることも目的としていた。そして、実際本プログラムを受講した何人かは、その後海外での学びに挑戦している。

初年度ということもあり、まだ改善点はある。特に佐藤も指摘しているように当初目的としていた「日常の暮らしを持続可能性の視点から考える」機会は十分にとることはできなかった。しかしリッチーも指摘しているように、日本の農業が直面する課題をデータだけではなく体験を通して語るための材料は提供できたのではないかと思う。

英語の習得および国際化のための各自の訓練（例えばディスカッション能力の向上訓練）において、それを効果があるものにするためには「長期的な計画」、「継続」、「定期的なレベルの確認」、そして「アウトプットの機会」があることが重要である。今回は初回ということで、試行的に期間も限定して実施した。このようなプログラムを実質的に効果のあるものにしていくには、上記の条件を満たせるような仕組みの構築が必要だろう。

その第一歩は、正規科目への移行だろう。そのうえで、半年ごとに一区切りと

はするものの、春学期、秋学期両方で開講し、さらに各期の英語授業内容や農作業、ディスカッションテーマに変化を持たせるなどして、年度をまたいで数年間のシリーズの形を取るようになれば、継続して参加する学生が現れ、上記の目的を達成できるのではないだろうか。また、一年を通して農作業を体験することも可能となる。

また、他の科目、例えば英語でのディスカッションを学ぶ科目との連携や、海外留学プログラムと連携すれば、さらに効果が上がるとともに、効果の測定も可能になる。さらに、学内学会での英語での発表を目標にするなど、既存の科目や行事と関連づけることでより高い効果が期待できるのではないだろうか。

正規科目化については、受講生からも同様の希望が出された。この点はリッチーも改善点として指摘している点である。5回に渡り、各回5、6時間の学びの時間と内容を考慮した場合、将来は正課科目として位置づけることができると考えている。